

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：30108

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00074

研究課題名(和文) エラノス会議における聖概念と心理学的治癒の連結に関する宗教学的的研究

研究課題名(英文) A study on the connection between the sacred concept and psychological healing at the Eranos Council.

研究代表者

奥山 史亮 (Okuyama, Fumiaki)

北海道科学大学・全学共通教育部・准教授

研究者番号：10632218

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、分析心理学者のカール・ユングとオルガ・フレーベ＝カプティンが中心となって創始したエラノス会議について、分析心理学と様々な思想潮流が交差した場として捉え、宗教や神話、民族をめぐる言論が「深層心理」という見地から語り直されていった過程を分析した。そのことにより、20世紀における宗教研究史/思想史の一端を解明することを試みた。具体的には以下の思想潮流とエラノス会議の関係性に着目した。  
A) 宗教現象学 B) アスコーナに展開したコムニオン運動 C) イタリア宗教学史 D) ユダヤ・ルネサンス E) ファシズム

研究成果の学術的意義や社会的意義

エラノス会議は1933年に第一回会議が開催されて以降、分析心理学、宗教学、神話学、心理療法、人類学など、多岐にわたる専門領域から数多くの論者が参加してきた学際的会議である。しかしエラノス会議が創設運営されてきた思想史的コンテクストについて、とりわけ宗教学/宗教研究との学的連関について、専門的な見地より詳細に研究されたことは殆どなかった。本研究では、アスコーナのコムニオン運動やナショナリズム運動において使用されていた「深層心理」という概念がエラノス会議に継承され、さらに宗教現象学等に受容されていった過程を分析解明し、「宗教」を心理現象と捉える20世紀思想史の系譜を叙述した。

研究成果の概要(英文)：This study examines the Eranos Congresses, founded by analytical psychologists Carl Jung and Olga Froebe-Kapteyn, as a forum where analytical psychology intersected with various currents of thought, and sheds light on the process by which discourse surrounding religion was recast from the perspective of depth psychology. Specifically, we focused on the relationship between the following ideological trends and Eranos.

A) Phenomenology of religion. B) The Commune movement in Ascona. C) History of religions in Italy. D) Jewish Renaissance. E) Fascism.

研究分野：宗教学

キーワード：聖なるもの 深層心理 宗教現象学 分析心理学 ナショナリズム

## 1. 研究開始当初の背景

エラノス会議とは、分析心理学者のカール・グスタフ・ユングが中心となりながらも、宗教学、神学、哲学、神話学、人類学など諸領域の研究者が集って宗教の根源的一体性、すなわち「聖なるもの」(lesacré, das heilige, 以下「聖性」「聖概念」と表記)を「治療」の領域において探求するために20世紀初頭に創設された学際的会議である。宗教学における聖性とは、あらゆる宗教現象がその根源に有するものと見なされ、宗教の本質を規定する概念として使用されてきた。エラノス会議はその聖概念を心理療法に転用し、精神の深層に潜む聖性を認識することが近代世界の精神的病理や文化的危機に対する「治療」になり得ると標榜した。すなわち精神の非合理的領域に潜在している聖性のエネルギーを意識領域に移行することができれば、治癒的効果が生じ、真に創造的な精神文化的活動が実現されると訴えたのである。

本会議には、聖概念をめぐる議論に深く関わったルドルフ・オットー、ファン・デル・レーウ、ミルチャ・エリアーデ、ラッファエーレ・ペッタッツォーニ、カール・ケレーニイ、ジョセフ・キャンベル、ゲルショム・ショーレム、エーリッヒ・ノイマン、鈴木大拙などの宗教学者・宗教研究者が参与し、聖概念と心理療法の関係性、およびその治癒的効果について議論を展開した。エラノス会議は、聖概念と心理療法を理論的に組み合わせ、既存のあらゆる組織宗教を超えると同時に治癒的効果を有する普遍的宗教を精神の内に作り出そうとした、宗教研究者による「宗教刷新運動」であったと考えられる。宗教学者の「宗教刷新運動」としては、諸宗教間の交流を目的としたオットーの「宗教的人類同盟」が知られているが、エラノス会議では人間精神や文化における問題を「病理」と捉えてその「治療」を試みるという、宗教研究者・治療者及び患者という医療的構造を想定した点が特徴である。

現代の宗教研究一般においては、本質主義的思考を批判的に捉えるポストモダンの研究の急増により、宗教の本質として自明視されてきた聖概念が西洋近代のプロテスタント的価値を帯びていることが指摘されてきた。しかし聖概念が形成された状況は、欧州のうちにおいても各言語圏によって大きく異なるため一括りにして論じることはできず、各言語圏を代表する宗教学者が展開した言論の内実を、歴史的コンテクストを踏まえて詳細に分析することが新たな課題として突きつけられている。

## 2. 研究の目的

このような現状に対して本研究は、エラノス会議において、各言語圏の宗教学者が聖性の治癒的効果に関して交わした議論内容をたどることにより、聖概念の普及拡大を目指した「宗教刷新運動」が本会議において生じるに至った歴史的過程を解明することを目的とした。すなわち、本会議が人間精神と聖性の関係をどのように捉えていたのか、本会議の参加者が宗教学的研究と「宗教刷新運動」をどのように区別し、あるいは同一視したのか、「宗教刷新運動」を展開することで大学をはじめとする制度的学知と異なる知の潮流をどのように形成しようとしたのか、といった問題を中心に据え研究を実施した。

ただしエラノス会議は1933年創設から現在に至るまで継続しているが、聖概念について学際的な議論があったのは上記の宗教学者たちが参加していた1950年代までであり、その後は元型心理学が中心となりその性質が変化している。そのため、本研究計画では1950年代までのエラノス会議を対象とした。

## 3. 研究の方法

エラノス会議の内実は、使用言語や関連地域が多岐に及ぶために総合的把握が困難であると考えられ、その先行研究は極めて限られていた。我が国では平凡社が刊行した「エラノス叢書」によってその一端が知られているのみであり、その全体像の把握は未着手の状況にある。さらに限られた先行研究においても、民族主義運動へのユングやエリアーデの関与に着目したもの(S. M. Wasserstrom, 1999)、ユング心理学の自己啓発的性質が帯びる霊的価値を好意的に受容したもの(Hans T. Hakl, 2001)、鈴木大拙や井筒俊彦に関する個人史研究上で断片的に言及したものに留まってきた(上山安敏、1984年)。

それに対し本研究は、エラノス会議に関わった宗教学者が活動したドイツ・オランダ圏からイタリア、ルーマニアに至る領域を視野に入れた地域横断的かつ歴史的研究見地から研究を進めた。すなわちルーマニア語圏の宗教学を専門とする代表者、イタリア語圏の宗教史学を専門とする江川純一、ドイツ・オランダ語圏の宗教学・神学を専門とする藁科智恵が共同し、エラノス会議と宗教学の関係性を総合的な見地より把握することを目指した。さらに、従来の研究ではユング心理学の理論形成の場としてエラノス会議を捉える傾向が強かった(Carrie Dohe, 2016)が、本研究ではエラノス会議を宗教学の理論展開の場として捉えることにより、宗教学的見地からの新たなエラノス像を提示することにつとめた。

資料としては、『エラノス年報 Eranos Jahrbuch』、ペッタッツォーニとエリアーデの往復書簡(L'histoire des religions a-t-elle un sens? Correspondence 1926-1959, 1994)、オットー・グロースをめぐるユングの書簡や診断記録などを分析の対象とした。

#### 4. 研究成果

本研究では、上記の方法に沿って代表者と分担者が共同して資料を分析整理し、下記 ~ の研究報告を行なった。

**聖概念に関するエラノス会議以前の議論と本会議への受容に関する調査：**エラノス会議創設以前における聖概念に関する議論がどのように本会議に流れ込んだのかを分析し、本会議創設および運営をめぐる歴史的コンテクストを明らかにした。エラノス会議の前史としては以下の2つに着目した。

A) アスコーナに展開したコミュニケーション運動。

エラノス会議の開催地アスコーナは、19世紀末より、都市生活とは異なる価値形成を求める生活改革運動家、菜食主義者、性解放運動家らが集い、コミュニケーションを形成していた。とりわけフロイトのもとで精神分析を学んだオットー・グロースがコミュニケーションにおける中心的役割を担っており、ユングの理論形成に大きな影響を及ぼしたと考えられる。藁科はアスコーナでの現地調査および資料分析を行い、その成果を報告した。

B) オルガ・フレーベ、ユング、R. オットーとヴィルヘルム・ハウアーの関係実態。

ヴィルヘルム・ハウアーは、オットーとの学的連関を有する一方で、深層心理論を宗教研究に応用することを試み、本会議創設に先立つ時期にヨーガに関するセミナーをユングと共同で開催していた人物である。オットー、ユング、オルガ・フレーベ、ハウアーの思想的連関は本会議初期の活動方向性に大きな影響を及ぼし、ユングの民族主義的言論にも作用した可能性を奥山が報告した。

**「エラノス年報」ドイツ語版および英訳版における宗教学的概念の使用実態調査：**宗教学者たちの聖概念に関する評価と受容を明らかにするために、『エラノス年報 Eranos Jahrbuch』に収録されており、関連が強いと考えられる講演録の分析と訳出を実施した。とりわけ聖概念をめぐる議論に積極的に関わったケレーニイ、エリアーデ、ペッタッツォーニ、キャンベル等の講演録を中心に調査を実施し、聖概念、元型（アルケタイプ）、深層心理等の諸概念が宗教研究の分析において使用されるようになった過程を明らかにした。これらの研究成果は、代表者および分担者がそれぞれの所属学会において報告した。

**エラノス会議関係者の往復書簡における分析心理学的概念の受容と評価に関する分析：**聖概念と心理学的治療の結合、および集合的無意識を始めとする心理学的概念を宗教学に応用することについては、エラノス会議関係者の間においても慎重な意見が出され、多くの議論が交わされていた。その議論内容は『エラノス年報』からも読み取れるが、私的な往復書簡の分析からはエラノス運営の方針に関わる記述も含み、より率直な見解を把握することができた。とりわけペッタッツォーニとエリアーデの往復書簡にはエラノスの運営方針、参加の経緯にまで踏み込んだ記述があり、宗教史学と深層心理論の協働可能性に関して、両者の見解を読み取ることが可能であった。江川と奥山がイタリアのサン・ジョヴァンニ・イン・ペルシチエート歴史文書館において書簡の収集調査を実施した上で、既刊の *L'histoire des religions a-t-elle un sens? Correspondence 1926-1959, 1994* を参照しながら研究報告としてまとめた。さらにペッタッツォーニとエリアーデ往復書簡の全訳も作成し、公表を目指して準備を進めている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 奥山史亮	4. 巻 Vol.26
2. 論文標題 エラノス会議における心理、民族、宗教の展開：ユングの民族論と分析心理学	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 精神医学史研究	6. 最初と最後の頁 24 - 28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥山史亮	4. 巻 21巻
2. 論文標題 エラノス会議におけるユダヤ・ルネサンスと分析心理学の展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『宗教と倫理』	6. 最初と最後の頁 1 - 14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 江川純一	4. 巻 24巻
2. 論文標題 近現代イタリアの政教関係 ベッタッツォーニのイタリア共和国憲法批判を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『研究所年報』	6. 最初と最後の頁 87-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 奥山史亮	4. 巻 48
2. 論文標題 戦間期ルーマニアにおける宗教現象学の形成	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道科学大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 147-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 江川純一	4. 巻 XXVII特別号
2. 論文標題 ベトナムにおける宗教現象学と宗教史学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京大学宗教学年報	6. 最初と最後の頁 219-228
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藁科智恵	4. 巻 41
2. 論文標題 世紀転換期ドイツ・プロテスタント神学における『神秘主義』- R. オットー理解の観点から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際関係研究	6. 最初と最後の頁 81-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 奥山史亮
2. 発表標題 大戦期エリアーデのナショナリズムと戦後の宗教現象学
3. 学会等名 北海道基督教学会第61回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 奥山史亮
2. 発表標題 エリアーデにおける IAHR創設とナショナリズムの問題
3. 学会等名 日本宗教学会第81回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 奥山史亮
2. 発表標題 大戦期エリアーデにおける国家統合と国民の追悼の問題
3. 学会等名 宗教倫理学会第23回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 奥山史亮
2. 発表標題 エラノス会議と宗教学 ユングとエリアーデの関係を中心に
3. 学会等名 日本精神医学史学会第25回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藁科智恵
2. 発表標題 R.オットーにおける「宗教史」理解
3. 学会等名 日本宗教学会第81回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 江川純一
2. 発表標題 IAHRローマ大会におけるペッタッツォーニとヴァティカン
3. 学会等名 日本宗教学会第81回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 江川純一
2. 発表標題 ベッタツツォーニ宗教史学の起源と展開
3. 学会等名 宗教現象学研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 江川純一
2. 発表標題 近現代イタリアにおけるイスラーム
3. 学会等名 「西洋の世俗と宗教」研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 江川純一
2. 発表標題 ファシズム期の宗教史学と人類学
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 奥山史亮
2. 発表標題 エラノス会議における心理、民族、宗教の展開 ユングの民族論と分析心理学
3. 学会等名 日本精神医学史学会第24回大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 奥山史亮
2. 発表標題 ユングにおける群衆心理と人種心理学 - 初期エラノスとの関連
3. 学会等名 宗教倫理学会2021年度第3回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 奥山史亮
2. 発表標題 エラノスにおけるヨーガ研究と宗教刷新運動
3. 学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藁科智恵
2. 発表標題 オットー・グロースと心理学
3. 学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江川純一
2. 発表標題 一九世紀英国の宗教研究
3. 学会等名 宗教の起源研究会
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 奥山史亮
2. 発表標題 エラノス会議におけるユダヤ・ルネサンスと宗教学の展開
3. 学会等名 宗教倫理学会第21回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 奥山史亮
2. 発表標題 ユングにおける群衆心理と人種心理学
3. 学会等名 エラノス研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藁科智恵
2. 発表標題 エラノス会議の場としてのアスコーナ
3. 学会等名 エラノス研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 R. R. マレット、J. G. フレイザー、W. ロバートソン・スミス、R. H. コドリントン、江川純一・山崎亮 監修	4. 発行年 2023年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 488
3. 書名 マナ・タブー・供犠 英国初期人類学宗教論集	

1. 著者名 藁科智恵	4. 発行年 2022年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 320
3. 書名 ルドルフ・オットー『聖なるもの』と世紀転換期ドイツ 信仰と近代学問の相克	

1. 著者名 伊達聖伸、小川公代、木村護郎クリストフ、内村俊太、江川純一、オリオン・クラウタウ、加藤久子、立田由紀恵、井上まどか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 332
3. 書名 ヨーロッパの世俗と宗教	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	江川 純一 (Junichi Egawa) (40636693)	明治学院大学・国際学部・研究員  (32683)	
研究分担者	藁科 智恵 (Chie WARASHINA) (60868016)	日本大学・国際関係学部・助教  (32665)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------